

詩時評

第34回

ゲーテを想う

松本衆司

やや手前味噌だが、一九九一年に出版した小さな詩集にこんな詩を書いた。「ゲーテのように／若草の中に／体を押しあて／力を込めて／途方に暮れる」、三十代後半の詩だ。

「ゲーテは水木の哲学の師であった。家族の証言によると復員後も心の糧であり人生を歩んで行く杖であった。ゲーテは幸福は目の前にあるのだと言う。そう言いながら全生涯において真に幸福であったのは四週間とはなかつたとも言う」とは、今回、引用した足立悦男の詩の一節だ。今、改めてゲーテを想う。

「川口千恵子詩集『催花雨』（土曜美術社出版販売）を読む。「ハイ・ジュード」を引く。

ポール・マッカートニーの／京セラドーム公演に行つて来ました／七十一歳のポール

は元気でしたよ／三十七曲二時間半／休まなく水も飲まずに歌い続けました／オーラが眩しかったです／昼休みの弁当タイム／BGMはいつもビートルズでしたね／男子全員丸坊主の高校／四十七年前のあなたは／東京公演に行きたがっていました／私がポールのコンサートに行つたと／知ら羨ましがるでしょう／やはり最後の曲は／ハイ・ジュードでしたよ／レノンとシンシアが破局した時／彼らの息子五歳のジュリアンに／ポールが作った曲／チェコがロシアに侵攻された／プラハの春では／民衆の心を一つにした／革命ソングとなった曲／あなたが教えてくれましたね／／悪いことばかりじゃない／恐れるな／いい日が来るさ／ポールのリードで何度でもリフレイン／／さっと私も／そう言つてもらいたいのですね／もういないあなたに

ラブ・レターが一篇の詩であるように、一篇の詩がラブ・レターであることもある、この詩のように。詩や音楽が人々の心を支え、時を超えて生きていくように、恋もまたその人の心の中でささやかな風景とともに生き続ける。

佐峰存詩集『雲の名前』（思潮社）を読む。「雲の国」を引く。

人のいない車内の床に焼きついた足の痕跡を、／覚えて改札を出ると、街の隅々まで水浸しだった。／風が指をそらせて懐中電灯のように探る、／あなたの忘れてた爪も持つてきた、／古書をひらくと 丁度／目の前の雲について書かれている／一度たりとも 姿を繰り返さず 渦の交点で／辛うじて原形を留めている／誰かの描いた路上で／無軌道に啄む煤けた翼や／信号機の境界を 隕石の大きさと／横切る水素バスの鱗粉を／束ねながら 空には時折 雲の国があらわれる／何もないところから 素子の集落が 火を焼き膨らんで／／肢が影として伸びていく。／秒針をたぐると手首の枝が冴えて、／褐色の羊皮紙に刻まれた王妃の頸脈に、／冷えた木肌と自転があられた、／から今は毛を巻いた夕波が瞬いている。／視線を離れた隙に、雲の境は変わっていた。／「崩れた塔にのぼつたことがある、／野晒しの瓦礫の丘では／轍が陽射しへと溶けつづけ／観光客が石英に向けて微笑んでいた／時刻は鳥の速度で発つていく／航空機の形状には未だに慣れない／雲の中葉に 確かな声が積もっている／通りすがりの焰が匂う。／肺のあたりが歓楽街と明るんで、／荒れた地殻が見えてきた。隆起のもとで、／重なる臍の根を教えるこ

とはできない。／／ながい漂泊を経て／
符合する 人々の顔に混じりつつ／辻褃の
合わないあなたが 目を出してやってきた
／私達は 再び気象を追いかける 早足で
／歩きながら 先々の／眠りのことを考え
ていた／発芽するようにこぼれていくね／
等圧線を潜り抜けると ためどなく／液晶
の小径が 湧いていた

空を眺める。雲が流れる。雲がときには骸
骨に見え、鯨に見えもする。想像は膨らみ、
あらぬ世界に導かれもする。佐峰存の詩の起
点もそこにあるのだろう。詩を書き写してい
て流れる詩語の連想に像を結ばず、途惑いも
するが、眺める雲との語らひもそうしたもの
だろう、と感心する。

坂東里美詩集『考える脚』（滯標）を読む。
帯に「文字・言葉への偏愛」とある。「蹊」
を引く。

大きな足のトムおじさんは／両手にいつぱ
いの果実を抱えて／アメリカの大地に立つ
ていた／今も見えない鉄の足環で繋がれて

字を解体することで見えてくる世界を書く、
というテーマがこの詩集にはある。そこには、
字の向こうに潜む真実が映し出されもし、ま

た時にロマンが醸し出される。嘗て、私も
「民」という字の成り立ちを知り、人間とい
う生き物の残酷さを思ったことがある。

田中啓一詩集『愛の挨拶』（詩遊社）を読む。
タイトル詩「愛の挨拶」を引く。

マイ・エンディング・テーマを作るのが／
ブームだった頃がある／弥生が／「これ、
私のエンディング曲集。持っていてね」／
と言って／一枚のCDを私に渡した／「も
しもの時には使うよ」／こんなやり取りを
交わしたあと／一番大切なものをしましう抽
斗にしまった／／弥生の葬儀の日／読経の
始まる前に／CDから／「アベマリア」が
流れた／選曲のわけを聞かなかったのが悔
やまれた／／亡くなって三年たったある日
／一番大切なものしまつてある抽斗を／整
理していると／交際を始めた頃に／プレゼ
ントされた音楽テープを見つけた／／「愛
の挨拶」というバイオリン曲が収められて
いる／渡そうとする弥生と／受け取ろうと
する自分を／思い出した／若かったあの日
が／弥生と私にあったことが／なつかしい

最後の「なつかしい」という一言がこんな
にも詩の中で浮き上がってくるなんて…、と
素直な読後感である。「一番大切なものをし

まう抽斗」は無論、「私」の心の抽斗でもある。
そこには愛の現実の始まりから終わりまでが
ある。

趙南哲著評伝『金芝河とは何者だったの
か』（コールサック社）を読む。第一章は「風
刺詩人から『生命思想家』への変身」という
題のもと、さまざまな角度から「金芝河」と
いう人物を読み解こうとする試みであり、第
二章は「信念―民衆詩を志向した詩人たち」
と題され、韓国の民主化運動を志した十二人
の詩人とその詩篇を論じている。その興味深
い論考の中から次の行を引く。

金芝河はとにかく二〇二二年五月八日に亡
くなった。／しかし、彼を悼む記事は韓国
でも、日本でも掲載されたが、その扱いは
あまり大きくなく、その後も金芝河を論じ
る文章はあまり見受けられない。／在日の詩人
金時鐘は、一九九八年に初めて訪日した金
芝河に会おうと言われたが、会わなかった
と述懐している。何故なら、「八〇年に長
きにわたる投獄から解放されてからは、人
間内部には全宇宙が生きているというよう
な『生命思想』を唱えたりして、抵抗詩人
の評判をずいぶん落としました。そんなこ
ともあり…」（『朝日新聞』二〇二二年五月
二七日付）、会うのに気が引けたと言うの

である。気持ちはよく分かる。今年、九四歳になる彼は「見すごされ、打ちすごされていることに思いがはたらく人が詩人なのです。おもねらず、なびかず、なだれていかず、そうであつてはならないことに与しない意志と自省。その中から芽生える詩こそ、あるべき詩だと信じています」（『朝日新聞』二〇一九年八月八日付）という信条をもった詩人だからである。

在日の詩人ゆえの趙南哲の深い論考による労作である。改めて、時代状況の中で、言いようのない困難を負わされた金芝河という詩人のぎりぎりの精神からあふれ出した言葉、その時の真実を私たちは忘れてはならない。大阪の地で、金時鐘という詩人の薫陶を受けた者の一人として、その思いは一層強い。

足立悦男詩集『水木ワールド探訪』（詩誌「夢」の会）を読む。「幸福の甘い香り」を引く。

ねずみ男は愛情協会のセールスマンと名乗った 人生がいかに不幸せに満ちているか
せつせと働いていれば人間は誰でも幸せになれるという それは違う ねずみ男は客に紙芝居をみせて ふたりの男の人生についてしんみりと語りはじめた／男Aは将来

の幸福のために昌平校を出て妻をめとる子供を育て昌平校にやり老後を送る やがて寿命を使い果たして死の床につく わしは少しも幸福ではなかったとつぶやく あなたは幸福の準備だけなされたのよと妻の声がかぶさる 味わうことをわすれていたのか と男はうなだれる／男Bは実業家であった 成功することを夢見て日々努力する 努力の甲斐あつて世にいう成功者となった 死期が近づいてくる 死の床で男はつぶやく ああ わしはまだ幸福の甘い香りをかいでない／愛情協会のセールスマン ねずみ男は紙芝居を語り終えて わしも天地がすぎゆかぬうちに幸福の甘い香りをかぎたい そう呟きながら どこへともなく去って行く 去っていくねずみ男をナレーションが追いかけていく 誰もがほしがり誰もがつかみそこねる幸福 それは本当はないのかも知れない しかし人間は生きている限りそれを求めてやまない／幸福とは何だろうか 水木の手元にはいつもゲートルの本が置いてあつたという 水木がゲートルの哲学と出会つたのは十代の頃であつた召集令状が届いて鳥取連隊に入隊するとき雑誌には『ゲートルとの対話』（全三冊 岩波文庫）が入っていた 復員後もゲートルの本はいつも手元に置かれていた 気に入つた言葉に出会ふと紙に書いて壁に貼つてい

たという 人生をふりかえつて水木サンの八十％はゲートルですと回想している／ゲートルは水木の哲学の師であつた 家族の証言によると復員後も心の糧であり人生を歩んで行く杖であつた ゲートルは幸福は目の前にあるのだと言ふ そう言いながら全生涯において真に幸福であつたのは四週間とはなかつたとも言ふ 私の好きなゲートルの言葉である ゲートルもまた幸福を追い続けた哲学者であつた／水木は晩年になって幸福観察学会を設立する 会員は水木ひとり公表されているが もうひとりいたのではないか ねずみ男である ねずみ男もまた幸福の甘い香りを求め続けていた

「のんのんばあ」「妖怪ぶるぶる」「鬼太郎の誕生」「妖怪大作戦」「おばけナイター」「悪魔くん」等々、タイトルだけでもわくわくさせられる水木ワールド探訪である。足立さん は実際にある妖怪検定試験の最高齢受験者であり、鬼太郎のピンバッジを持つ妖怪博士である。その博士の生み出す水木ワールドは深い。ただ恐れ入るばかりだ。

四辻貴子作品集『Pretty Girl II』（濤標）を読む。「麦畑」を引く。

麦畑のように金色に言葉が溢れ出す。／そ

んな詩人になりたい。／娼婦賛歌を卒業した私は、／闇夜に撒かれた米粉のような言葉を紡げない。／人間嫌いだけど性悪説だけど、悔いのない人生を生きたい。／書き尽くしたい。／満月が古代の夜、／生物を照らしたような言葉を紡ぎたい。

集中、「フランツ・カフカ『流刑地にて』を読んで」という感想文の一節に彼女の創作の立ち位置を見る。「神様が本当に存在するのなら、どうして人間を創られたのか。作者は、神様と人間の間で世界を見ていたのかも知れません。『役割』について考えさせられる作品でもありました。先生。私の考え、感想、伝わっていますか？ 残酷な作品ですが、全てを受け入れて、温かい目で人間を書いている。絶望しているだけでは、書けない作品だと思います。また、教室で、皆さんと学べたらいいな……」短歌、詩、読書感想のいずれもが、この引用した詩「麦畑」と同様、豊かな才能を感じる作品集である。

山上直樹詩集『渚』（私家版）を読む。「一日」を引く。

四時四十四分。／十三階建てのマンションは曙光に輝く／一階の管理人は早起きで玄関を掃除する／二階の看護師は夜勤から戻

り寝たばかり／三階の会社員はゴミを出し駅へ駆け出す／四階の幼いママは娘を乗せ自転車で走る／五階の熟年夫婦は共同農園に出かけた／六階の中年の主婦はゴミ捨て場の整頓だ／七階の車椅子の青年はエレベーターの前／八階のおばさんは猫のエサを四つ買った／九階の小学生はペランダの花に水をやる／十階の老人は折れた傘を直しているよう／十一階の妊婦はドラマの再放送を見守る／十二階の少年は双眼鏡で沖ゆく船を覗く／十三階の若い二人が駐車場を後にする時／今日の最後の陽光がマンションに届く／いい一日だったね／ええ、いい一日ね

世界で戦争が続く。連日、ニュースではミサイル攻撃で失われた街が映し出される。愚かな人間の仕業だ。壊されるのは建物だけではない。それまでの当たり前の一日が壊され心が壊されていく。――世の中には作る人と壊す人がいる、嘗て、私は中高生たちのいる学校の教室でそう語りかけた。「いい一日だったね」、皆がそのような一日を作れる人であってほしい、と願いながら。

中西母ねこArtばえむ『詩の植物図鑑』（さいけい舎）を読む。詩画集である。作者名「母ねこ」は「もねこ」と読む。「詩ってな

あに」を引く。

私が 畑の 友達に たずねたら／花の咲き始めた ハクサイのはっぱを 食べている バツタ モグ モグ カリ カリ カリ／食べる 音かな ？／そういうと 真っ赤なめを光らせて ぴよんと 去っていった／春の畑 ナズナ ホトケノザ タンポポ／花盛り ブーンとやってきた アシナガバチ／ハチサン 詩って なあに？／ハチさん いそがしそうに 羽をうごかしながら／ハナからハナへとびまわって ハネを動かす音かな？／ブーン ブーンと さっさっていった／畑の 土をほりかえす 野菜の たねをまこう！／みみずさんのおでましだ！ ニヨロ ニヨロ みみずさん／詩ってなあに／ツチをシガ シガ ツチをたべて シガシガ することかな／私の詩は 何かな いつか みつけられるかな？

もねこさんは、こうして畑の植物やら野菜やら昆虫やら蛙やら、時には土偶にも話しかける。それが楽しい詩になり、楽しい絵になるのだ。だからこの詩画集はとも愉快だ。私たち読者は、改めて気付かされる。いのちの営みって、ああ、こんなに愉快なものなのだ、と。それはまさに詩そのものだ。